

説教 『すべてがひっくり返される』 山本護 牧師  
 聖書 イザヤ書 6:8~9 / マルコによる福音書 16:1~8

現存する聖書各文書は写本のみで、マルコ福音書の有力な写本はすべて「16:8」で終わっている。最後を私訳してみると「そして、何も言わなかった…誰にも。恐ろしかったから、なぜならば…(マルコ 16:8)」。復活を告知する妙に暗示的な結び。私たちはこの復活の気配を、その雰囲気のまま受け取りたい。

十字架の死を遠くから見守っていた女たちは(15:40)、イエスの墓で「白い長い衣を着た若者(天使)」に遭遇し、「あの方(イエス)は復活なされた(16:6)」という告知を聞く。そして「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。[あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる~](16:7)」と命じられた。ところが女たちは、「墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである(16:8)」。十字架の時には堪えられた女たちだが、天使たる若者との出会いでは錯乱した。おいおいダメじゃないか、「弟子たちに告げなさい」と命じられているのに。逃げ去って口を塞いでいては、復活したイエスのことが弟子たちに伝わらないではないか。

「主は言われた。[行け、この民に言うがよい。よく聞け、しかし理解するな。よく見よ、しかし悟るな、と](イザヤ 6:9)」。復活の報告は、聞いたから「理解できる」ものではない。見たから「悟れる」ものではない。私たちは、死さえも超克する復活の出来事を「よく聞く」。だがすぐには理解できない。福音書に記された出来事を「よく見る」。だがすぐには悟れない。女たちは一時的に沈黙したが、復活は伝えられ、キリストの身体である教会が形成されていく。多くの者がよく聞き、よく見た結果だ。

「あの方は復活なされて、ここにはおられない(マルコ 16:6)」という天使の言葉を聞いても、女たちには喜びが生じない。それどころか恐ろしくて正気を失った(16:8)。何故か。「十字架につけられたナザレのイエスを捜している(16:6)」のに、それが見つからず絶対自明の「死」が揺らいだからだ。女たちは何のために墓へ行ったのか(16:2)。死者を丁重に弔い(16:1)、引き裂かれた思いを、己が心に納得させるために墓へ行った。「死」を見つめていた女たちは(15:47)、「死を承認」しようとした場で、十字架に秘められた、とんでもない真実に遭遇する(16:6)。混乱するのは当然のことであろう。

女たちは震え上がった(16:8)。白い長い衣の若者を(16:5)、化け物と勘違いしたからではない。天使たる若者が告げた「イエスの復活」という逆転の真実に、正気を失って口を閉ざしたのだ(16:8)。女たちの常識や献身は、復活によってすべてひっくり返されてしまった。これが単純な喜びであろうはずはない。呆然自失であり、一からのやり直しであり、全面的な受け身への転換である。聞いたからといって理解できるような代物ではない。見て悟れるような生易しいことではない(イザヤ 6:9)。

「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい(マルコ 16:7)」という命令。絶望した弟子たちに告げよ、と。とりわけ傷の深いペトロに告げよ、と。復活されたイエスと、故郷のガリラヤで再会する(16:7)。私たちにとっては、ここで、だ。キリストに従い、ここで死を超克する奇跡を体験することになる。



【おまけのひとこと】

死はもっとも確かな生命現象 世の基準はここから建ちあがっている 心はそれに沿って納得し  
 納得することで均衡を保っている 復活はその底部をひっくり返す だから喜びというより混乱